

災害原発 「復興」の影

■ 身を守る ③

「甲状腺の被ばく量の福島医大教授の鈴木真一（57）は「個人の正確な（被ばく）線量は知られていない。今はがんの発見率を見ている」と述べるにとどめ、被ばくで増加するとされる甲状腺がんは、甲状腺に「県民 安心できない」状態を推計はできていないと現状を語った。甲状腺被ばくを検査するべきだったと話しながら、甲状腺がんは、甲状腺に「高い線量の甲状腺被ばくがあったとは、今は想定されていないが、甲状腺被ばくを検査を進める。」

ヨウ素消え推計困難

初期被ばくの不安続く

「当時、一体どれだけの被ばくだったのか」。飯館村長泥地区の嶋原良友（63）は原発事故発生後約2週間、孫3人と自宅にいた。村全域が計画的避難区域に指定されたのは、事故発生から1カ月以上も後。長泥地区は特に放射線量が高いと分かった。「『健康に影響はない』と言った字者は、将来にわたって責任を持つのか」と不安を語る。

「個人」の線量は不明だが、甲状腺検査を行う。どの子ども約千人を対象に甲状腺被ばくを測定した結果などを基に線量推計を進める放射線医学総合研究所の担当者も「9割は高い被ばくはなかったと推計できしたが、一人一人を対象と」推計で（半減期）が8日間と短く、長く今も残るヨウ素129は安心できない。学今測定結果から推定する調「消えたヨウ素」をめぐる。たまりやすい放射性ヨウ素が主因とされる。しかし、つつなげよう。原発事故で大量放出されたヨウ素131は、ヨウ素131の土壌濃度分布を、半減期が線量が分からなければ県民は安心できない。ヨウ素129は安心できない。



県外避難希望者のために用意されたバスに乗り込む飯館村民。計画的避難はさらに1カ月後だった
=2011年3月19日、飯館村役場

り、初期のデータ不足が放射線影響の解明に影を落とす。嶋原は、がんが今見つかっているのは精度の高い集団検査の結果だと受け止めているが、「分からない間、不安は続くんだ」とつぶやいた。

（文中敬称略）

遠隔操作ウイルス インターネットを介して外部から他のパソコンに入り込み、操作するウイルス。2012年、遠隔操作ウイルスによる犯行予告の書き込みなどで4人が

時事
解説

も変わる。亭のようなまれたころを仕入れた主のもてなんの心に響る▼フリーワールドカ大会が閉幕ら参集したした笑顔が温かなもてたと。《2